

第三次世界大戦8

フィンテックの戦場

大石英司

Eiji Oishi

立ち読み専用

立ち読み版は製品版の1～25頁までを収録したものです。

ページ操作について

- 頁をめくるには、画面上の▶（次ページ）をクリックするか、キーボード上の▶キーを押して下さい。
- もし、誤操作などで表示画面が頁途中で止まって見にくいときは、上記の操作をすることで正常な表示に戻ることができます。
- 画面は開いたときに最適となるように設定してありますが、設定を変える場合にはズームイン・ズームアウトを使用するか、左下の拡大率で調整してみてください。
- 本書籍の画面解像度には1024×768pixel(XGA)以上を推奨します。

挿
画
安
田
忠
幸

目次

プロローグ	11
第一章 帰還	19
第二章 シヤフター陸軍基地	40
第三章 脱出と包囲	68
第四章 投降	98
第五章 勝利条件	127
第六章 掃討戦	153
第七章 生き残った者	180
第八章 新たな敵	203
エピローグ	221

登場人物紹介

日本

《防衛省》

〈特殊部隊サイレント・コア〉

どもんこうへい
土門康平 一佐。ようやく昇進したことで、浮かれ気味。部下には辟易とされている。コードネーム：マウナケア。

〔原田小隊〕

はらだたくみ
原田拓海 一尉。元は小牧基地の教育隊所属の救難教育隊救難指導員。土門に一本釣りされ小隊長に任命される。コードネーム：K2。

はたけともゆき
畑友之 曹長。分隊長。冬戦教からの復帰組。コードネーム：ファーム。

たかやまけん
高山健 一曹。分隊長。西方普連からの復帰組。コードネーム：ヘルスケア。

おおしろまさひこ
大城雅彦 一曹。土門の片腕として活躍。コードネーム：キャッスル。

まちだはるお
待田晴郎 一曹。地図読みのプロ。コードネーム：ガル。

みずのともお
水野智雄 一曹。元水泳の強化選手。分隊長に出世した。コードネーム：フィッシュ。

たぐちしんた
田口苾太 二曹。部隊随一の狙撃手。コードネーム：リザード。

ひがひろみ
比嘉博実 三曹。ドンパチ好きのオキナワン。田口の「相方」を自称。コードネーム：ヤンバル。

あづまだいき
吾妻大樹 三曹。山登りが人生だという男。コードネーム：アイガー。

〔姜小隊〕

かんあやか
姜彩夏 三佐。元は韓国陸軍参謀本部作戦二課に所属。司馬に目をつけられ、日本人と結婚したことで、部隊に引っ張られる。コードネーム：マカルー。

うるしばらけとみ
漆原武富 曹長。姜小隊ナンバー2。コードネーム：バレル。

ふくとめだん
福留弾 一曹。鹿児島県出身で、部隊のまとめ役。コードネーム：チェスト。

いいかける
井伊翔 一曹。姜小隊のITエンジニア。コードネーム：リベット。

みどうそうま
御堂走馬 二曹。元マラソン・ランナー。コードネーム：シューズ。

あおこうじさねあつ
姉小路実篤 二曹。父親はロシアビジネス界の大物。コードネーム：ボーンズ。

かわにしまさふみ
川西雅文 三曹。元Jリーガー。コードネーム：キック。

ゆ ら しんじ
由良慎司 三曹。西方普連から引き抜かれた狙撃兵。コードネーム：ニードル。

お だ ぎりしやう
小田桐将 三曹。タガログ語を話せる。コードネーム：ベビーフェイス。

あ び る あきら
阿比留憲 三曹。対馬出身。西方普連から修業にきた。コードネーム：ダック。

あかばねたくま
赤羽拓真 士長。フィールドでのゲテモノ食いに長ける。コードネーム：シェフ。

〔訓練小隊〕

あま り ひろし
甘利宏 一曹。元は海自のメディック。生徒隊時代の原田拓海一尉の同期。

〈陸上自衛隊 西部方面普通科連隊（WAIR）〉

し ば ひかる
司馬光 二佐。西方普通科連隊付き教官。朝霞で婦人自衛官の教育に当たれば一佐に昇進させてやると言われているのだが……。

〈第一ヘリコプター団〉

むら た もりと
村田護人 三佐。村田家次男。

むら た りんこ
村田凜子 一尉。村田護人の妹。明野で偵察ヘリに乗っていた。

《海上自衛隊》

〔南支派遣艦隊〕

たかとおまさや
高遠雅也 海将補。南支派遣艦隊司令を務める。

そめ や とし お
染谷俊雄 一佐。首席幕僚。

ばんどうかねと
板東兼人 一佐。“かが”艦長。

かねさか
兼坂すみれ 二佐。艦隊情報幕僚。

〔第七航空隊〕

ふじわら み き
藤原美沙 二佐。岩国基地第九一航空隊司令。回転翼パイロットとしてスタートし、後に双発に転じ、海自初のジェットであるU-36Aのライセンスももつ。

〔インド洋派遣艦隊〕

ご み いさみ
五味勇美 海将。連合艦隊司令長官。航空集団司令から、自衛艦隊司令を最後に退官。P-3C乗りで、藤原美沙の父親に鍛えられた。

え がわとし き
江川俊樹 海将補。

たけうちこうすけ
竹内幸輔 二佐。作戦幕僚。

〔ヘリ搭載護衛艦“ほうしょう”〕

いずみ だ せんえい
泉田宣泳 一佐。艦長。

はしぐちはじめ

橋口 肇 二佐。副長。

みやぎ あすか

宮城明日香 一尉。気象班長。

(哨戒機部隊)

はた の まこと

波多野 誠 一佐。AL-1エアボーン哨戒機「ヤマタノオロチ」の戦術航空士役。テスト・パイロットであると同時に、マサチューセッツ工科大学で航空工学の博士号を取った変わり者。コールサイン：メデューサ。

たばた ごろう

田端悟郎 二佐。「ヤマタノオロチ」機長。

ゆう き み さ き

結城美佐紀 一尉。「ヤマタノオロチ」副操縦士。

〈航空自衛隊〉

(二〇二飛行隊)

むらた きさと

村田先斗 二佐。F-35Aに乗る。村田護人、凜子の兄。

(民間軍事会社)

おとなしせいじ

音無 誠次 営門一佐。〈サイレント・コア〉の元隊長で、今は自衛隊退役者からなる民間軍事会社を立ち上げてその顧問となっている。偶然ハワイに来ていて巻き込まれた。

こぐれりゅうじ

木暮 龍 慈 元一曹。狙撃手。音無の部下。二〇年前に自衛隊を引退してからは、北海道でマタギとして暮らしていた。コードネーム：ジャッカル。

//// アメリカ //////////////////////////////////////

《アメリカ合衆国大統領行政府》

エリザベス・ケンジントン 大統領。

ケイティ・ヘンドリクセン 国務長官。

コリン・コンラッド 大統領首席補佐官。アマンダ・マクノートンの上司。

アマンダ・マクノートン 新補佐官。安全保障問題担当次席補佐官から国家安全保障問題大統領補佐官へ就任。

クインシー・ショー ホワイトハウス広報室長。

〈海軍〉

〔南シナ海派遣部隊〕

マイケル・ゴトー 中佐。南シナ海派遣部隊参謀。三代続く日系人。

〈陸軍〉

〔第25歩兵師団〕

デレク・キング 中將。元の師団長が負傷し、その後役職を引き継い

だ黒人陸軍中將。別名：クラッシャー・キング將軍。

〔第25歩兵師団隷下 第4空挺旅団“スパルタン”〕

クラーク・マッケンジー 中佐。大隊長。

カイル・バタスキー 中尉。第501落下傘歩兵大隊“ジェロニモ”本部管理中隊付き偵察小隊を率いる。

トーマス・ワン 曹長。小隊を纏める補佐役。

マサミチ・ドウモト 伍長。

マック・キム 一等兵。韓国系。

ケイコ・ノックス 一等兵。

〔第7エンジニア・ダイブ分遣隊〕

ブルース・イノウエ 大尉。

ジミー・ボラード 伍長。

〈海兵隊〉

セリーヌ・D・タッカー 海軍少将。少将に出世したばかりの女性。
(レジスタンス)

タケル・サトー 少佐。ハワイでルーカス・カトーのバイト先である
ガンショップを経営。七〇歳を超えているが、銃の腕は確か。

チヨコ・サトー タケル・サトーの孫娘で、ルーカス・カトーの幼馴染み。

ルーカス・カトー ハワイ大学マノア校で機械工学を学ぶ青年。チヨ
コとの写真が“アラ・ワイ運河の恋人”として、全世界の注目
を浴びる。

中国

《中央弁公庁》

ファンジュエマオ

範 学 毛 中国共産党中央弁公庁主任。

〔中央巡視組〕

イェン ア ロン

嚴 亜龍 中央巡視組香港警察連絡官。

〔香港警務処〕

シユイユウキン

徐 裕堅 高級警司。香港警務処機動部隊を率いる。

リウエイシー

黎 慧 詩 警長。徐裕堅の秘書兼副官。

ルウホイウィン

陸 海 栄 香港の学生運動家。学費のために自分から香港警務処にス
パイを志願。

〈陸軍〉

ウェイリイシイ
ウービン

韋立新 少将。

ロンブワンフエイ
ソンリ

龍鵬飛 少佐。世界の奇襲戦法が専門。日本のアニメオタク。

宋莉 精華大学情報工学科の俊英にして“シャングリラ”の設計者。

龍鵬飛が雇ったハッカー集団にいて、彼と行動をとともにしている。

〔第一〇八特別監察旅団〕

ウービン
リンカン

武彬 大佐。林剛の元上官。彼をスカウトした。

リンカン

林剛 中佐。

タオツモ

陶子黙 一級軍士長。

〔第一〇一待機旅団〕

イエシュイトン

葉旭東 少将。

トゥツチエン

杜子健 大佐。参謀長。

チワンチュウファン

程卓凡 大佐。政治将校。

シーモン

石萌 少佐。元々はハワイ島攻略部隊の情報参謀だったが、負傷した

杜子健大佐より参謀長職を託され作戦参謀兼参謀長代理になる。

チンユイタン

金語堂 大尉。

クッハオ

顧浩 中尉。慎重な性格を見込まれ、金大尉に部下ごと引き抜かれた。

レンシュエチュン

任学軍 曹長。

〈海軍〉

チイウトン

邱通 中佐。随級通常動力潜水艦“遠征057”の艦長。

カオファン

高凡 少佐。“遠征057”の副長。水測員上がりで、音のことにめっぽう詳しい。邱通中佐とのコンビは、中国海軍潜水艦隊最強と賞賛されている。

///シンガポール///

クー・シェンロン 国防大臣。若く野心家で知られる男。

ヤオファンファン

姚芳芳 クー・シェンロン国防大臣の妻。香港人で元民主運動家。

///ロシア///

ゲンナジ・オルレンコ 空軍中佐。ユラン・リーダー。

///インド///

マヘシュ・ラセカール 博士。インド人技術者を束ねるエンジニア。

二〇歳で数学の博士号を取得し、二四歳で物理学の博士号を取った天才科学者。

第三次世界大戦 8

フィンテックの戦場

プロローグ

二枚のモノクロ写真が、タブレット端末の小さな画面に映し出されていた。いずれも、ビルの上の階に設置された交通監視カメラで撮影されたもので、群衆と、にらみ合う警官隊を撮影していた。

一枚目はどこかの古びた建物の玄関を囲むようにして、群衆が集まっている。三〇〇から五〇〇人くらいはいた。対する警官隊は、ほんの二〇名ほどだ。看板が写っていたが、解像度が低く、そこに描かれている文字は読み取れない。

そして二枚目は、衝撃的なものだった。道路を挟んで建物側に固まっていた群衆が散っている。

そして警官隊の隊列は崩れ、発砲していた。路上

に四人が倒れている。解像度の低さから、辛うじてそれが制服警官ではなく、民間人らしいとわかる写真だ。性別までは判別できない。

一枚目も二枚目にも、時刻表示が入っていた。それを見ると二枚の写真が撮られた間には、一五分の開きがある。その一五分の間に、何か突発的な事態が起こり、警官隊が発砲したということだろう。

あつてはならない事態だ。だが、現場から一万キロ近くも離れたここハワイでできることは、何も無い。

ワイキキ・ビーチ沿いのホテルに設けられた司

令部では、人払いした上で参謀たちが集い、息がかかるほどの距離で額を付き合わせ、そのタブレット端末に表示された写真に見入っていた。

第一〇一待機旅団を率いてオアフ島に上陸した葉旭東陸軍少将が、ロツカーや柵を衝立代わりにして作った部屋で「これはどこだ？」と、小声で尋ねた。

「黒竜江省の、黒河市。黒竜江を挟んで、対岸はもうロシアです。銀行の前ですね。明らかに取り付け騒ぎのようです」

参謀長代理の石萌少佐が、走り書きしたメモを見ながら言った。この写真は、国内の状況を伝えるために北京から送られてきたものだ。

ところが、世界のインターネット網がダウンしたことで、軍の回線も影響を受け、粗い画像しか受け取れなかった。静止画の、たった二枚だけだ。だが、その画像がもつ意味は非常に重い。

「何が、起こっているんだ？」

「今朝から——北京時間の今朝という意味ですが、三度、照会してやっと送られてきたのが、この二枚の写真です。説明は一切無く、参謀のみが閲覧可とありました」

政治将校の程卓凡大佐も、困った顔つきで言う。

兵たちの動揺が報告されたのは、つい二時間前のことだった。その時点では、インターネットがどうも繋がりにくい、とりわけ中国大陸には全く繋がらないという話で、これは香港でフェイク・ニュースが民心を惑わしていることに対抗するための措置だと考えられていた。

ところが、なぜか影響は中国全土に広まり、国内でのインターネット回線もダウン。それはあつという間に世界規模に広まっていった。

「アメリカのラジオ、衛星テレビでのニュースを

総合しますと、人民が現金を求めて、営業時刻前から銀行の窓口に行列を作ったそうです。まだ暗いうちから、ATMが空になり……」

石少佐が、メモを見ながら話す。

「だから、なぜ、インターネットと現金が結びつくんだね!!」

少将が、自分が知りたいのはそこじゃない、という感じで問うた。

「は、はい。中国人はご承知のように、現金を信用しません。偽札は多いですし、国家の都合で、いつ紙屑になるかもしれないと疑うような時代を長く経験しましたから。財産は、金や宝石などで持っていました。スマホというか、オンライン決済のアリペイが普及し、人民の現金離れは更に加速しました。あらゆる買物、キャッシュレスになった。もう、銀聯カードすら持ち歩きません。そもそも、クレジットカードはあまり普及しませ

んでしたが。……今時、カードすら使わず現金決済に執着しているのは、世界中でも日本人くらいです。我が人民は、銀行口座には決済用の金しか置いていません。アリペイだけで、今や五億人を超える利用者がいます。インターネットがダウンしたことで、茶菓子一つ買えなくなりました。朝起きてネットが使えないとわかった途端、皆がATMへと殺到し、その騒ぎは銀行の窓口へ——当然、銀行はこの事態を想定していませんから、引き出せる現金が店に届くまで窓口を閉めたり、一度の引き出し額に制限を設けたりしたことで、それが更に不安を拡大。一瞬で、取り付け騒動に発展した模様です。CNNは、ロシア・メディアの報道として、中国国内の数千カ所の銀行支店を取り付け騒動が起こり、一部の都市では暴動にまで発展していると報じました。もちろん、フェイク・ニュースの可能性はありますが……」

「われわれの政府は、何か声明を発したのかね？」

「現時点では、まだ何も。テレビ、ラジオでも、全く報じられていない様子です。おそらく政府は対応に追われていて、それどころではないのですよう」

「しかし、われわれはここからネットに接続できるんだが」

「細々とながら、軍の衛星回線でテキスト・データをやりとりできる程度です。メールや、ニュース・サイトを覗く程度のことは可能です。ただし、返事は期待できません。アメリカも、一時、あちこちの回線がダウンしたようですが、今は復旧しつつあります。欧米のニュース・サイトの記事を読むことは可能ですね」

「兵士が情報にアクセスすることは？」

「問題はそこです」

程大佐が、困った顔で口を開く。

「すでに、情報は拡散しつつあります。床で寝ている負傷兵まで広がっています。兵士からは、隠し持ったスマホはいったん取り上げましたし、そもそもゲリラが連絡に使うため、携帯網の回線は遮断してあります。ただ、固定電話は使えていますし、地元政府との協定で、ケーブルTVの類も使用は許している。だから、どこかの住宅に押し入れば、インターネットが使える環境はあるでしょう。ハワイには、中国系の移民も多い。兵士から、自分の親に無事なことを報せるメールを一本送りたいと懇願されれば、ネットを使わせる現地の同胞はいる。そういう情報はあつという間に広がり、その者の家の前に、兵士がバスで乗り付ける羽目になる。それに、どこで手に入れたのか、分隊ごとにラジオも確保しているようなのです。語学ができる連中は、短波放送でニュースを聞い

ているし、FM放送はたいした設備も必要ないので、ゲリラが海賊放送を一日中流している。アメリカに忠誠を誓う中国同胞が、北京語で兵士に投降を呼びかけている番組もあります。これまではあまり厳しく取り締まるのもどうかと思い、流言飛語の類に惑わされるなど命じた上で、黙認してきましたが……」

「そういえば、そのラジオで入手した情報ですが、ロシア製無人機による沖縄への攻撃は、失敗した模様です。嘉手納^{かてな}基地から避難させられていたプール取材の記者団が基地に戻ってきて、基地が全く無傷であることを現地から生中継していました」

ハワイ大学に留学し、英語が堪能な石少佐がそう報告した。

「一発も？ 全く、無傷なのか!？」

「はい。自衛隊が使っている那覇^{なは}基地は民間も使

っていて、民間人が比較的自由に出入りできますが、こちらにも、攻撃は一切無かったと日本のテレビ局が現地から報道しています。理由は不明ですが、作戦は完全に失敗した模様です」

「襲来する一〇〇〇機の無人機が搭載するミサイルを、一発も寄せ付けなかったというのは……^{にわか}俄には信じ難い。いったい、何が起こったんだろうな。この攻撃の勝利が、士気を上げたはずなのに。つまり、状況としては、われわれは勝ってはいない。——そういうことか？」

葉少将は、顎に包帯を巻いた痛々しい姿の参謀長・杜子健^{トウツチエン}大佐へ向けて言った。

頭に巻かれた包帯ならまだ見栄えもするが、頭から顎に掛けてぐるぐる巻きにするのは、痛々しさしか感じないことを、大佐の負傷で皆知った。「……朗報は、何もありませんが、少なくともそれらのニュースは、全て外の話です。この島に留

まるわれわれが気に病んでも、どうこうできる話ではありません」

大佐は、時々苦痛に顔を歪^{ゆが}めながらも一気に喋った。

「しかしなあ。本国の上級司令部に事態の説明を求めたら『察してくれ』とばかりに、こんな写真を二枚だけ送って超越すのは、末期的だと思わないか。われわれは、もっと困難な状況に何度も直面してきたのに……」

「要請は、政治将校たる自分の名前で行ったことです。少将の名前なり、部隊として要求すれば、また別の返事があったかもしれない」

「それで、軍の衛星回線まで影響を受けているとなると、スパイ衛星が得た情報をもらうことにも支障が出るということだな？」

「はい。残念ながら、衛星画像をここで直接受信することはできません。戦車部隊がパールシティ

を進撃してくることも、兵士の視界に入るまでは探知は無理です」

石少佐がタブレット端末を仕舞いながらそう答えた。

「わかった。そこら中にビルがあるから、上から見張ればそれほど必要性はないだろう。二点注意しよう。まず政治将校団は訓話を作り、部隊の末端まで徹底させてくれ。今更隠しても仕方がないし、情報の遮断は士気を下げるだけだ。ただし、本国で発生している事態はやがて終息するし、ここにいるわれわれには関係無いことを、くれぐれも理解させてくれ。そして石少佐は、その語学力を活かし、引き続き情報の収集に当たってほしい」

「はい。海外留学経験のある者を集めて、ホテルの回線で最新ニュースを集めさせます」

「よろしく頼む。ところで、そのインターネット

網のダウンだが、アメリカが仕掛けたことではないのか？」

「アメリカ側の専門家の解説では、香港のインターネット基幹網は、中国国内から制限をかけられるような特別な仕掛けがしてあり、それがフィードバック・ループを起こして全土のネットワークをダウンさせ、世界にも影響を及ぼしたのだろうと推測していました。中国国内のメディアでも、アメリカの関与を示唆するニュースはありません。そもそも、国内からニュース自体が一本も流れてこない状況ではあります。これは個人的な推測ですが、党としても、事態を大げさにしないためアメリカの仕業だと声高に非難するのは避けたいのではないでしようか」

「わかった。とにかく、われわれは軽率妄動けいそふどうせず、できることをしよう。それにしても、アリペイだって？ 君らは、入れているか？ 私は、自

分のスマホは、メールしか使わないが」

その問いに、杜大佐と程大佐は、まるで月の裏側の出来事のように首を横に振ったが、石少佐は違った。

「常識ですよ、將軍！ 西側では、電子商取引電子コマースとか、フィンテックとか呼ばれていますが、ネットの決済を制するものが金融市場を制するんです！ 戦争で世界を手中にすることはできませんが、金融市場ではそれが可能です。現金やカードへの信用が無かったことが幸いし、この戦争では中国は有利な立場にいます」

「私は、嫌だな。自分の稼ぎを全て携帯できるなんて……。スマートフォンを金庫に入れて、担いで外出しなきゃならない」

「限度額の設定など、今は細かなサービスがあるので、紛失や盗難事故にも備えられます。お時間があれば解説します」

「よし！ では、この話はこれまでに。正直、本国の状況を案じている余裕は無いがな……」

休憩を命じ、この区画から締め出していた兵士らをまた作戦室に戻す。

パールシティに陣取っていた味方部隊の撤退戦で、明け方まで激しい戦闘を繰り広げた。

そのせいか、敵は夕暮れが近づいた今まで静かにしてくれていた。

すぐ近くに通信兵たちが陣取る区画が作ってある。異変があればわかるが、今日は彼らも静かだ。時々、^{いびき}軀が聞こえてくるほどだった。

このまま平和に一日が終わってくればいいのに——そう皆が思うようになった。

上陸当初は、オアフ島全土を占領する意欲満々だったが、見通しは甘く、アメリカ軍はすぐ立ち直った。

レジスタンスの編成も早く、結局、ヒッカム空

軍基地やパールハーバー海軍基地も早い時期に手放さざるを得ず、今は、ホノルル市街地を点々と占領しているにすぎない。

アメリカ軍の空海からの大規模な補給や増援は今も続いており、中国軍は、いつ押し潰されても不思議ではない状況だった。

第一章 帰還

ベッティ・マイズナー空軍少佐を乗せたオスプレイ輸送機は、ライカーズ島刑務所を離陸し、夕暮れのメリーランド州フォートミードの国家安全保障局本部に着陸した。

普段、NSA本部から滅多に外に出ることのない彼女にとって、今日はめまぐるしい一日だった。

ライカーズ島刑務所の隣にあるラガーディア空港からC-17A輸送機に乗り込み、かつての同僚であり恋人でもあったカズオ・レベジェフが有人ロケットに乗って旅立つ姿を見送った。

彼女がラガーディア空港に戻ってくる頃にはすでに決着は付いており、一〇〇〇機にも及ぶロシ

ア製無人機は、三〇分で地球の裏側まで辿り着いたレベジェフが、現場上空からウィルスを直接仕込んだことによって全滅した。

だが、レベジェフが乗っていた再突入体「ペガスス」は撃墜され、レベジェフは還らぬ人となった。

彼女がその報せを受け取ったのは、ライカーズ島刑務所に戻り、システム・スタッフと帰り支度を整えていた時だった。

結局、マイズナー少佐は、段ボール一箱に収まるレベジェフの遺品を受け取り、オスプレイに乗り込んだ。

二人の関係は、とつくに終わっていた。

レベジェフがNSAを辞めた後、交通標識にテープを貼って自動運転カーに事故を起こさせ、巻き添えで親子連れが死ぬという事件を起こす前に、すでに終わっていたのだ。

だがこの半日は、三沢^{みさわ}基地で一緒に働いていた頃のようなときめきを思い出していたことも、事実だった。

NSA本部に戻ってきた彼女は、会議室で一人待たされた。大きな任務をやり遂げたことで、皆ほっとしているかと思いきや、インターネット上で起こった事態と、最新の軍のネットワーク・システム——多機能先進データリンク^{MADALINK}・システムがハッキングされたことでパニックに陥っていた。

元はいえ、その混乱はNSA、ひいてはレベジェフの発言が引き金だった。

「香港で、フェイク・ニュースをばらまけばいい」。

そう主張したレベジェフの言葉を盗聴していたNSAが、CIAやイギリスの英国^M対外情報部と組んで情報工作を開始したことに根を上げた北京が、香港のインターネットを遮断した結果、この事態を招いたのだ。

マイズナー少佐は段ボール箱を開けると、しばらく元恋人の遺品を整理した。彼の遺族は、日本に戻った母親だけだ。

今更、シャツなどを送っても仕方がないか——。そう考えていた時、ようやくイーライ・ロッドマン空軍准将が「待たせてすまない」と言いながら現れ、コの字型に配置されたテーブルの斜め向かいに腰を下ろした。

「それは、レベジェフ博士の私物かね。もう家などはないんだらう？ 悲しいな。あれだけの偉業を成し遂げた人物の全財産が、段ボール箱一つに収まるなんて」

「昔から、物には執着しない人でしたから」

「それは、何？」

准将は、テーブルの上に立てられた手彫りの人形に視線を向けた。ほんの、二インチもない人形だ。

「これは、仏像というものらしいです。彼の愚行によつて亡くなつてしまつた少女らを悼み、刑務所にいた日本人受刑者が彫^ほつてくれたそうです」

「……彼の最期についてだが、海面に着水した後、破損箇所から浸水した。パイロットは、自分が脱出するのが精一杯だったようだ。現場は沖縄本島から三〇〇キロ西の大陸棚の端で、日本側は危険を冒して搜索活動を行つてくれたが、彼は発見できなかつたという。パイロットの報告からも、おそらく機体と一緒に沈んだだろうと……。戦争が終つたら、日本が責任をもつて機体を引き揚げると言つてくれたらしい。先ほど副長官とも話し

たが、彼の功績を称えるため、NSA職員としての待遇を与えることになった。ホール玄関の壁のレリーフに名前が彫られ、遺族にはそれなりの弔^{ちやうい}慰金と年金が支給される。もし君が配偶者であることを主張するなら、その手続きに尽力するつもりだ」

「その必要は、ありません。遺族としての権利は、すべて彼の母親にお願いします」

「わかつた。それでだが、この一日は大変だった。君は自宅に戻つて休みたまえ。ああ、誤解してほしくないのだが、別に人手が足りているとか、君が不要だという意味ではないんだ。気持ちの整理をつける時間も、必要だろう」

「そんな余裕が、組織にあるんですか？」

「いや、無いな。全く無いよ」

准将は疲れ切つた表情でそう言つた。

「現在、二つの問題を抱えている。一つ目——中

国はeコマースが崩壊して、パニックになっている。銀行の取り付け騒ぎなんて、全く想定していなかったらしい。われわれもサイバー戦争を考えなかったわけではないが、これまでは控えていた。しかし、この状況下に、この手は使えるのではという声が上がっている。NSAには、引き続きネットワーク網をダウンさせることができるか否か検討せよという命令がきた」

「^{もろは}諸刃の剣ですね。それで中国経済を混乱させることはできません、一方で、人民がネットを使って正しい情報入手する手段を閉ざすことにもなる……」

「そう。だから、インターネットそのものではなく、オンライン決済網だけを狙い撃ちにする。それを大急ぎで準備中だ。そしてもう一つがMAD L——こちらは、もっと深刻な問題だ」

「あの、本当に、破られたんですか？」

「ああ。しかし、実害はない。ファイアウォールが起動して、システム全体をシャットダウンさせた。だから、漏れた情報も何かを仕込まれた形跡も無いが、セキュリティ・ホールを一つ発見して、今大急ぎでパッチを当てているところだ。あといくつあるかは、全くわからない」

「現場は、だいぶ混乱したんじゃないやありません？」

「ああ。F-35部隊があらかた離陸した後を狙って仕掛けられたからね。特に海軍は、海軍統合火器管制^C対空^Aが使えずに困っただろう。だがわれわれは、事前にMAD Lのハッキングを警告でき、NSAの面目を保てた。これもレベジェフ博士のお陰だな。そういえば君は、^ミピョートル大帝^グのニックネームをもつロシア人ハッカーのことを知っているかね？」

「ロシアのハッカー紳士録で、読んだ記憶があります。だいぶ昔のことのような記憶がありますが、

たしか、天才少女でしたよね？ ホワイトハッカ
ー大会で、彗星すいせいのように現れたティーンエージャ
ー。でも彼女はその後、軍にリクルートされ、姿
を消したと記憶しています」

「そうなんだ。てっきり軍で活躍しているんだろ
うと思っていたら、どうも彼女はプーチン政権が
気に入らなかつたらしい。ある日忽然こっぜんと姿を消し
た。CIAは、ロシアがここ一週間必死になって
その『ビョートル大帝』の行方を追っているとい
う情報を得ていたが、その理由まではわからな
かつた。だが、MADLがハッキングされたことで
ようやく繋がった。彼女はハッカーの聖地、アム
ステルダムに潜伏していた。そして二日前に、ち
よつとした騒動で、ロシアによる誘拐事件が露呈
した。その時点では、誘拐されたのがどの誰か
も、誘拐犯についてもわからなかつた。しかし、
CIAの顔認識ソフトに照合し、一〇年前に撮ら

れた一枚の写真と合致したことがわかつた」

「もしかして、誘拐被害者がその『ビョートル大
帝』だつた？ なら、たつた一人でMADLに挑
んだのが彼女ですか？ 凄才能ですね」

「CIAは、彼女を誘拐したグループは、まだオ
ランダから出ていないとみて、必死に搜索中だ」
「では、人海戦術でセキュリティ・ホールを探す
しかないでしょうね」

「そうは言うが、MADLの運用がはじまつても
う一〇年にもなる。そんなに長いこと使つてい
て見つからなかつた穴が、一日二日で出てくるはず
もない。今は彼女が、予備の弾をもっていないこ
とを祈るしかないな。というわけで、正直に言え
ば、君のようなベテランに休みを与えられる状況
ではないんだ。その上で、私は君に休むことを勧
めている」

「ありがとうございます。ほんの二時間、仮眠室

で休ませてもらえれば、大丈夫です」

「わかった。そうしてくれると、ありがたい」

准将は制服の胸ポケットから、折りたたんだペーパーを一枚取り出して滑らせた。

「レベジェフ博士は、沈没寸前にUSBメモリーをパイロットに手渡したらしい。中には、君宛ての私信が一通入っていた。この紙は、それをプリントアウトしたものだ。私は読んでいない」

「クラウゼン空軍中佐は、どちらに？」

「クラウゼン？」

「あのペガサス・ロケットのパイロットです」

「おそらく、とつくに本土行きの便に乗ったはずだ。他にもロケットがあるのかは知らんが」

「状況が落ち着いたら、中佐と話をさせてください。レベジェフの、彼の、最期を知りたいんです……」

准将が会議室を出ていくと、マイズナーはペー

パーを手に取り、しばらく見詰めた後に開いて読んだ。

それは予想した通り、自分宛てに書かれたレベジェフの遺書だった。

赦しをもらえたことを感謝する言葉があった。

——馬鹿な男。あなたを赦すことなんて、あるもんですか……。せめて数時間、時間を巻き戻すことができたなら、行くなと、止められたのに……。マイズナーは、しかしこれ以上、悔やむことは無かった。

彼があの戦場に行かなければ、今頃、嘉手納基地も那覇空港も、焼け野原になっていただろう。たった一人の男が、我々の世界を救ったのだ。

開戦初期、アメリカ空軍が爆撃した後、日米両軍によって、南シナ海北西のベトナムに近い西沙

諸島の二つの島が占領された。今は、それぞれ航空自衛隊と海兵隊が航空拠点として再利用している。

ベトナム側のトリトン島を空自が利用し、その東のウッディー島を海兵隊が利用し、海南島^{かいなんとう}進攻の足がかりにした。

だが、海兵隊による海南島上陸作戦は、橋頭^{きやうとう}堡^ほの確保までは成功したが、そこをロシア軍の無人攻撃機に破壊され、部隊はまだ海岸付近でまごついていた。

そして航空自衛隊も、無人機による次の攻撃が沖繩になるだろうとの判断の下、南西諸島へと部隊を引き揚げさせた。

折しも台風並みの低気圧が接近し、支援部隊もあらかた引き揚げることになった。

僅かの留守部隊と、陸上自衛隊のコマンドが守る中、風雨に紛れて中国軍のコマンドが上陸して

きたが、からくも基地は守り切った。

航空自衛隊初のステルス戦闘機部隊であるF-35A部隊を率いる第二〇二飛行隊隊長の村田先斗^{むらたさきと}二佐は、沖縄沖航空戦が完璧な勝利で終わると、誰より先に基地に引き揚げた。

彼らが戻ってくるまで島の防空を担っていたのは海上自衛隊のF-35B部隊で、そのコクピットにいたのは、村田の弟・護人^{もりと}と妹の凜子^{りんこ}だった。

つい昨日まで、陸上自衛隊のロングボウ・アパッチ戦闘ヘリを操縦していた村田護人三佐の二機編隊は、長兄が着陸するほんの五分前にトリトン島基地に着陸していた。

着陸する寸前、陸上に放置された兵士の遺体が見えた。敵か味方かはわからない。まだ回収どころではなさそうだった。

先斗二佐は、弟の機体のそばに寄せてエンジン切る。地上に降りて空を見上げると、心なしか

★ご覧いただいた立ち読み用書籍はPDF
形式で、作成されています。この続きは
書店にてお求めの上、お楽しみください。